

# 大会長挨拶

## —今、私たちに問われていること— 『地域の再生、「つながり」の回復』

東京での学術大会によろこそ、皆様のご参加を心より歓迎致します。

私が本学会の大会長を勤めるのは、2002年の第6回大会（静岡）に続いて2度目です。再び、このような貴重な機会を与えて頂き、会員の皆様にはお礼を申し上げます。

10年前は「健康日本21」が始まる前後で、新しい健康福祉政策への期待と不安が一杯の中、本学会関係者の皆様から、実務的な計画論の話や市民の参加のあり方、方法などを学ぶことが多かったと記憶しています。その後、10年の間に、世界は大きな経済危機に見舞われ、新自由主義が世界を席卷し、医療と福祉・教育の分野に幾多の災いをもたらしています。また、日本は歴史的な大災害（東日本大震災と福島原発事故）を経験しましたが、このような不幸な事態が現実には生じようとは、当時の誰も想像していなかったと思います。私的にはこの10年間は、私自身が母の介護・看取りの体験から、日本の社会保障の不十分さを痛切に感じさせられた日々でした。一言で言えば、この10年間は自分や家族の生活の質が低下、後退していくのを、皆で必死に支えてきたような時代であったと感じています。

20世紀は2度にわたる「世界の戦争とそれからの復興」の歴史であり、人間の悲惨な状態とそこから回復過程を目の当たりにした時代でした。今までの10年間は振り返ると、21世紀は「グローバルな災害・テロとそこから復興」の世紀となるかもしれないと感じています。

そのように考えたとき、本大会のテーマ『地域の再生、「つながり」の回復—今、私たちに問われていること—』が意味することは、過去にも、現在にも、そして、私たちの未来にも共通した課題への、対応策の模索である、と言えるでしょう。

今、健康福祉に関する新しい施策が展開されようとしています。食育や第2期健康日本21、障害者制度改革、そして世界ではNCD（生活習慣病対策）など。本大会を通じて、新自由主義的な言葉に振り回されず、患者・家族・障害者そして市民の生活実態を支えるような施策や政策を見つめる目を養いたいと思います。

今回の学術大会の開催にあたり、学内外の皆様のご協力を得ましたこと、心より感謝致します。また、東京家政学院大学、並びに、健康栄養学科の皆様には、本大会を平成24年度の現代生活学セミナーと関連づけて開催して頂き、様々な面でご支援を賜りました。ここに心よりお礼を申し上げます。

第16回日本健康福祉政策学会・学術大会  
大会長 松田正己  
(東京家政学院大学健康栄養学科・公衆衛生学教授)